狂気の食堂 まっちゃん

エンジン

　たまにあっても、木枠の扉ががたついて、作業着姿の常連が薄暗い店内を占領しているような、とても入る気にはならないような所ばかり。とにかく、くつろげるような店があってくれればいいのだが。
　そう思いながら辺りを見回していると、ようやく良さそうな場所を見つけることができた。錆び付いたガレージやアパートが並ぶ中、一軒だけ浮いた真っ白な店。こじんまりとした木の看板には「新鮮ご飯や　まっちゃん」

　「開けたら閉めてね」という札のついた扉を開くと、涼しい風とハーブの穏やかな香りが私の肌に触れた。テーブルが二つほど並べられた小さな店内は、外と同じく白基調の落ち着いた空間で、窓際には鈴蘭の添えられた花瓶が飾られていた。

「らっしゃい！」

　カウンター店主の顔を見て、「がんこ寿司」の看板を思い浮かべた。がんこ寿司というのは関西地方を中心に展開している居酒屋チェーンで、その看板というのが、はちまきを巻いて口をへの字に曲げた、四角い顔の中年男の顔なのである。下手をすると美容院と間違えそうなくらい都会的で洗練された空間において、こうした風貌の人物の登場は意外であった。

「いやあ、ほんまお客さんは神様ですわ。こんな辺鄙なところですから、この店の中をちらと覗いてくれるだけでも、わしうれしゅうてうれしゅうて」

　大阪南部和泉の人間ですら今時使わないようなこてこての関西弁と大げさな表情で、店主はまくし立てた。

「ほな、このメニューの中から気に入ったもん選んでもらえまっか」

　店主に手渡された薄紫の分厚いブックを開くと、そこにはこういった名前の料理が箇条書きにされていた。

　シャキッとトマトの野菜ごはん

　青じそと梅ごはん

　歯ごたえ鯛ごはん

　ピリッと秋刀魚ごはん

　丑の日鰻ごはん

　絢爛海老ごはん

　ほかにもたくさんあった気がするが、これだけしか覚えていない。

　パッと見て、混ぜご飯のようなものを想像した。内容もそうだが、均一６００円という手頃な値段に興味を惹かれた。

　とりあえず、「丑の日鰻ごはん」を頼むことにした。多分、ひつまぶしのようなものだろうと思ったのだ。

「あいよ！　ちょっと待ったってや！」

「あいよ！　ちょっと待ったってや！」

　威勢の良いかけ声の後、店主は店の奥に引っ込んでいった。それからしばらくの間、輪切りレモンの入ったお冷やをちびりちびりと飲みながら、料理が来るのを待っていた。

　そして、店主が自信に満ちた表情を浮かべ、料理の載った盆を持ってこちらにやってきた。

「はい、お待ちどうさん！」

　ほかほかのご飯の上に、丸々一匹生のうなぎがだらしなく横たわっていた。一瞬、何が起きたのか分からなかったが、改めてテーブルを眺めて、状況を把握した。

「どうぞごゆっくり！」

　店主が七味唐辛子や醤油の入った容器を持ってきた。これをかけて食えということなのだろう。

　とりあえず、箸で尻尾の方を掴んでみたが、まごうことなきそのまま生の鰻で、このままでは食いようがない。動物のようにかぶれとでも言うのか。

　「何で食わんのでっか」

　ボーッとしてる私に向かって、店主が枯れた声でぼやいた。

「食べ物、無駄にしはるんでっか？　お残しは許しまへんで？」

　店主は険しい顔で、私をじっと見つめている。

　仕方がないので、鰻の尻尾を箸で掴み、恐る恐る口に入れた。旨味のない酢こんぶを噛んだような味覚が口の中に広がり、思わずえずきそうになったがこらえた。疑念を持って私をじっと睨んでいる強面の男に、何をされるか分からないからだ。

　だが、やはりこれは食えない。箸で生鰻を掴んだまま、私は再び呆然とするしかなかった。

「口つけとって食わんってのはどういうこっちゃ」

　店主は完全にキレている。クーラーの風が暑く感じられ、手が小刻みに震え始めた時、突然扉が開いた。

　そこには、折りたたみの日傘を手にした老婆がにこやかな顔で立っていた。

「来ちゃった」

枯れてはいるが、上品な声だ。

　その老婆の姿を見るやいなや、店主の顔つきが急におだやかになった。

「あ、あああ、毎度毎度おおきに、もうほんま、さあさあ、こちらに座ってどうぞごゆっくり」

　明らかにのろけていた。

　老婆はしばらくの間お冷やを飲みながらメニューを眺めた後、「絢爛海老ごはん」を注文した。

「よろしくね」

老婆のウインクに、店主は両腕をわきわきと震わせる。

「へい、ただいま！」

　そして喜びいさんで店の裏に引っ込んだ、と思ったら数分もしない内に料理を盆に載せて戻ってきた。

　ほかほかのご飯に、生の車海老が三匹。

　「まあ、新鮮でおいしそう」

　老婆はほっそりとした指で海老を掴むと、吸いつくようにぷちゅぷちゅむしゃぶり始めた。青く濁った体液が白米の上に落ちていく。後で気づいたが、殻すら外していなかった。

　店主は今にもとろけそうな顔で、その光景を眺めていた。

　チャンスだと思い、私はテーブルの上に食事代を置き、こっそりと店を出て行った。

　それから、ただひたすら走った。

　汗まみれになりながら走り、何十分か走り回った所で、ようやく知っている道に出られた。心臓も激しく鼓動していたが、頭の混乱と緊張がしばらく収まらなかった。

　それから数ヶ月後、私は京都の鞍馬を歩いていたのであるが、全く同名の店を見つけた。外観こそあれに比べれば随分薄汚れていたが、雰囲気がよく似ていた。

だが、その日も暑かったので、きっと気のせいだろう。

　もし万が一、私が見たものが真実であるとすれば、あの狂気の食堂が人々に受け入れられ、様々な場所に伝播しているということだが、そんな世界で私は生きていける自信がない。

（完）

狂気の食堂　短編

http://p.booklog.jp/book/92666

著者：エンジン
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lazeengine/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/92666

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/92666

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ